参考資料

第3回　災害の自分事化協議会

議事要旨

目次

1．災害の自分事化協議会　規約 …… 01

2．第3回　災害の自分事化協議会　議事要旨 …… 04

議事1　前回の振り返りと本日の議論 …… 04

議事2　良質な情報を伝える仕組み …… 09

議事3　プロジェクトの進め方・体制 …… 11

災害の自分事化協議会　規約

（名称）

第1条　本会は、「災害の自分事化協議会」（以下「協議会」という。）と称する。

（目的）

第2条　協議会は、災害を自分事化し人々の防災行動を変えるために、全国各地に残る災害伝承に係る情報のうち、心を揺さぶり行動に誘う良質な情報（コンテンツ）を発掘・育成するとともに、その情報を伝える仕組みを全国で展開・普及する活動を通じて、災害による犠牲者を一人でも減らし、災害後も持続的な地域社会の構築を目的とする。

（協議会の役割）

第3条　協議会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる提言、支援、諸手続き等を行う。

1) 人の意識に働きかけ心を揺さぶる良質な情報（コンテンツ）の発掘、育成に関する事項

2) 良質な情報（コンテンツ）の登録、認定に関する事項

3) 良質な情報（コンテンツ）の伝達に関する事項

4) その他前条の目的を達成するために必要な事項

（取り組みの対象とする災害）

第4条　自然災害のうち、洪水、土砂災害、高潮等の水災害を主な取り組み対象とする。

（組織）

第5条　協議会は、会長、会長代理及び別表に掲げる委員をもってこれを組織する。

2 会長は、互選とする。また、会長代理は、会長の推薦とする。

3 会長は、会議運営に関して必要と認めるときは、委員以外の者に対して、協議会に参加し、その意見を述べ又は説明を行うことを求めることができる。

4 会長は、協議会の活動を円滑的かつ効果的に実施するため、協議会の合意を得て委員を追加することができる。

5 会長は、協議会の活動に対して外部有識者から提言を求めるため、協議会の合意を得て検討会を設置することができる。

（会長及び会長代理）

第6条　会長は、会務を総理し、協議会の会議の議長となり、協議会を代表する。

2 会長代理は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは会長の職務を代理する。

（事務局）

第7条　協議会の事務局は、一般財団法人　国土技術研究センター　河川政策グループに置く。

（雑則）

第8条　協議会による諸々の意思決定は電子メールによる照会により行うこともできることとする。

2 本規約の変更は、委員の合議により行う。

3 この規約に定めるもののほか、協議会の運営等に関し必要な事項は、会長が別に決定する。

附則

（施行期日）

この規約は、令和5年9月4日から施行する。

附則（令和5年12月21日改正）

（施行期日）

この改正は、令和5年12月21日から施行する。

（別表）

災害の自分事化協議会

委員

（会長）	今村　文彦	東北大学　災害科学国際研究所　津波工学教授
	大知　久一	一般社団法人　日本損害保険協会　専務理事
	岡村　啓太郎	全国地方新聞社連合会　会長　（高知新聞社　東京支社長）
	笹原　克夫	高知大学　教育研究部　自然科学系理工学部門　教授
（会長代理）	佐藤　翔輔	東北大学　災害科学国際研究所　准教授
	所澤　新一郎	一般社団法人　共同通信社　気象・災害取材チーム長
	徳山　日出男	一般財団法人　国土技術研究センター　理事長
	針原　陽子	読売新聞東京本社　防災情報サイト 「防災ニッポン」「防災ニッポン＋（プラス）」編集長
	廣瀬　昌由	国土交通省　水管理・国土保全局長

（敬称略、五十音順）

スペシャルアドバイザー

磯田　道史	国際日本文化研究センター　教授

（敬称略）

第3回　災害の自分事化協議会　議事要旨

日時：2023年12月21日（木）　自 13時00分　　至 15時00分

場所：一般財団法人　国土技術研究センター　7階会議室

議事1.前回の振り返り

・四つの評価項目自体はなるほどと思う。全て網羅したほうが評価は高くなることになっているが、一つの評価項目だけが抜きんでている場合の評価はどうなるのか。

・前回までの議論で評価項目を四つにまとめたが、評価項目の質に関する議論は進めていない。四項目を満たしてバランスがいいものが全て優良とは限らないので、質を入れてもよいと思う。

・四つの項目が全部埋まらないが、どこかに秀でているところを優良なものとして評価をすることに強く賛同する。「平時に備える」という文言は、時間として平時（平時の時点で）備えるという意味だと思うが、平時への備えのような助詞にも捉えられかねないので、例えば、「平時から備える」とか、「ふだんに備える」とか、言葉を磨いて欲しい。
もう一点は、プロジェクトの評価指標という表現に違和感がある。これらに関する取り組みは、このプロジェクトをやることの他に様々やっていることも影響して評価が変わってくると思う。プロジェクトの評価というよりも、自分事化された状態の評価みたいなもののほうが適切ではないか。プロジェクトそのものを独立変数として取り出すことは不可能なので、自分事化の現状評価という形にセットすることを提案したい。
次に、「認定候補」と「認定」ということで、同じ「認定」という言葉を使って整理されているので、とても分かり易くなったと思うが、認定候補の人がどちらなのか分からないようにも思う。事務局から他の候補として挙げられている案4の「認定」、「優良認定」の方が良いと思う。
また、四つの評価項目については、冷静に読めば分かるが、ぱっと見て、分かりづらいところもあるので、何かキーワードをアイコンとして置いたほうがよいのではないか。例えば、①は事実、基本情報みたいなところ。②は生々しさとか、リアリティーを求めているのではないか。③は備えの情報みたいな感じ。④は活動や仕組みみたいなところだと思う。

・「認定候補」と「認定」以外の候補として示されている案1から案3は少しテンポラブルな意味合いがある。先ほど「優良な」というキーワードも出たので、案4の「認定」、「優良認定」がいいと思う。

・例えば、地元の商工会、その青年部の方々の取り組みは、資料にあるような国土交通省の網羅的な内容に比べてバランスが悪い場合も想定される。一生懸命やっているものに対しては、試験の可とか不可みたいなイメージのある「認定候補」、「ノミネート」という名前よりは、もう少し上向きの評価をしたほうがいいように思う。

・せっかく何らかの認定を受けた時に、残念な名前よりは、いいものになったと喜んでいただける方が良いと思う。一方、そもそもの出発点として、「自分事化できるようないい情報はあまり出てない」という立場に立っていることから、四つの項目の内、①を満たしているものは比較的あるが、その他は必ずしも行ってないものが多いと思う。これから浸透して、いいものがどんどん出てくることを期待しているので、認定は四年間で、うかうかはしていられません、というニュアンスは残したい。取消しと言われるとショックか大きいかもしれないので、そこは募集の時に丁寧に書くこととして、名称としては「ノミネート」、「候補」よりは「認定」でいいのではないかと伺っていて思った。

・時限付きの認定ということと了解した。事務局としては、今日は決定でなく、方向性だけ知りたいということなので、もし異論がなければ、方向性としては事務局からお示しいただいた案4「認定」、「優良認定」ということでお願いしたいと思う。

・四年間という期限を設けるというのは主催者側としても非常に責任あるやり方だと思うが、外す時にどう伝えるかは考える必要がある。外したからもう駄目だよ、という駄目出しではなく、また頑張ってくださいね、ということをどう伝えられるのかということが、こちら側にとっても大きな責任だと思う。

・そこは重要な点だと思う。四年経つ時にもう一度評価をして、きちんとコメントし、それぞれについて、維持しているのか、課題があるのか、説明や評価が必要だと思う。

・いきなり、「あなたの取り組みは駄目です。」と言うのではなく、例えば、「どんどん良いものが出てきている中で見ると、あなたの取り組みは、例えば評価項目の何番のところがこういったものに比べるとちょっと見劣りしているので、もう少し改善できませんか。」とか「これだと、場合によると、次、再登録というのもどうか？という意見もありますよ。」というような話をして、どんどん良くなってもらうほうに誘導するということですね。

・例えば、三年目ぐらいで評価をさせていただいて、四年目までで改善があるかどうかというのを見るというのは、教育的なところかもしれない。

・充実させていくという趣旨に合う。

・四つの評価項目にアイコンをつけるというご提案は宜しいかと思う。例えば、もう少し分かりやすくすると、評価項目①はアイデアがないが、②はなぜというところをきちんと書いていただくとか、③は何をとか、④はどうやってというような、英語で言うと、Whyとか、Howとかになると思われ、その辺も整理できるといいと思う。全てに案はないので、提案ということで述べさせていただく。

・Web検索するとお薦めが出てくるが、1年間ほとんど何も書き込みがないと、だんだん後ろへ下がっていったりしているので、順番を変えるとか、一年間、何も変わらない場合は問い合わせるなど、三年目位から確認するのはいいかもしれない。

・釜石市にある「いのちをつなぐ未来館」を2回目に訪れた時、当時実際に避難した若い女性職員の方が説明してくれたが、その説得力は違う。普段から避難訓練とか震災の勉強をしていのか尋ねたところ、避難訓練は年２回位という事だった。ここまで来れば大丈夫という地点まで行って、振り返ると津波がどっと押し寄せてきている時にパニックにならなかったのかと聞いたら、大人が騒いで、慌て出したとおっしゃった。つまり、四つの評価項目の内、①、②はいろいろな資料、書き物とか、収集の仕方である程度存在すると思う。もし、これを傾斜配分するとしたら、直接避難に向く、③と④を重視する配点の仕方が、現実的なものを行動にしていく時には大事かと思う。

・それぞれの活動は非常に特徴的なので、四つの評価項目の③、④は重要だと思う。

・情報の受け手を二者設定するというのは非常に意欲的な取組であり、どうしても変わっていただけない方がいらっしゃる中で、こういう設定は良いと思う。情報の受け手①として学校の先生や地域のメディア等が例示されているが、地域の方ということで、例えば、防災士、自主防災組織などを含めて、候補は広い方が良いと思う。評価については、例えば3年目、2年目に中間評価というか、課題を指摘して、次期も認定されるように促すようなことがあってもよいと思う。また、こうしたプロジェクトそのものは流域治水協議会を抱える地域においては、学校教育に非常に生かせると思うので、評価項目④には防災教育という言葉があるが、生涯学習、学校教育、そういった文言も入れると、こういうものがあったら、そこから学ぼうとする動きが出てくるように思う。

・大切な三つの柱として「命を守る」「財産を守る」「早く回復する」としているが、「財産」という言葉が気になる。防災の分野で、確かに「財産」を守ると言うことは目標に掲げられていることが多い。しかし、重要なのは、命が助かるフェーズの次が生活を維持するとか、地域のつながりを維持する復旧・復興という段階になるので、「財産」というのはそこの中には当てはめにくいのでは？例えば、「地域」という言葉を入れて、地域（資源）、地域資源という表現もあるが、さらにはそのまま「地域」ではどうか？なお、少し広くなってしまうかもしれない。

・例えば、大切な柱を三つから四つにして、「命を守る」と「財産を守る」の間にその話を入れる。もしくは、実は命の中に生活も入っているパターンもあるので、それは捉え方によって変えなければいけない。

・「認定候補、認定」以外の候補として示されている中では、案4「認定と優良認定」に賛成する。これらはそれぞれ無限大に増えいくものなのか、それとも、ある程度、何件ぐらいずつみたいな、数を絞り、増やしていくものなのか。

・どのぐらい出てくるかは分からないが、最終的には、各地域というか、皆さんがお住まいのところに一つぐらいはあった方がよいのではないか。また、それがどんどん一直線に

増えるかというと、どこかで頭打ちになっていくのかなというようなイメージは持っている。いいものが残って淘汰されるように、認定の方は入替えで、四年過ぎたら徐々に、新しい、よりよいものに入れ替えていくことがいいのではないかと考えている。

・一般的には、数が多くても、悪い影響はあまりないと思う。

・ジオパークでは審査はあるが、増える一方。ただし、5月の学会ではそれぞれが切磋琢磨し合う発表の場であり、底上げができる面もあるので、多くても悪くないと思う。

・底上げすれば、数的には多くなると思う。

・ジオパークでは8月の全国大会ではセッション、交流の場等があり、刺激になり、良いと思う。

・一つの流域、自分が住んでいる流域で、心配で情報が知りたいとなったときに幾つかは出てくるのがいいと思う。いいものから順に掲載することで、見る側の都合も少し配慮でき、数がある程度あるというのがいいと思う。

・何もしなかったら、五十音順とか、北から順番とかだけになるので、クオリティーが高く、推薦順でもいいと思う。

・優良なものの内でも、何か星が付けたりすれば分かり易くなるかもしれない。

・評価項目①で、「事実関係が正確に書かれているもの」とあるが、無形のものもあるので、必ずしも記述されている必要はないと思う。例えば、「正確に伝えられているもの」くらい緩くしてもいいと思う。文字でないと駄目なのかもしれないが、それ以外を排除してしまう気がする。

・やり取りの中で、言葉として伝えているという視点は、参考にする。

議事2.情報を伝える仕組み

・今回の協議会の取り組みの中では、情報を伝えるところが一番重要だと思う。現在、仁淀川流域治水協議会だけではなく高知県内の市町村と関わっているが、市町村や商工会の青年部のエネルギーがある方々は恐らく、国交省の方が考えないような情報伝達の手段を持っている可能性がある。この方々は、ルートＩの受け手である年中行事主催者とか、地域のメディアとか、保険・不動産関係、これに類する方になると思うが、彼らの情報を伝えるやり方を評価するようにすれば、役所の中では出てこないような発想を取り込めるのでないか。そのためには、四つの評価の中で、情報の伝え方とか、そのプロジェクトの活用の仕方とかいうところを評価できるような仕組みがあればいいと思う。四つの評価項目と同列に評価するのかどうかは別として、プロジェクトの活用の仕方、情報の伝え方を評価することによって、そのような活用の仕方を考えてみようという意識を掘り起こすことができるのではないか。流域治水ではないが、高知県が主催している濁水対策に関する協議会に入っている土地改良組合の方々は、その地域の名士、有力者なので、地縁・血縁を駆使して小学校の生徒さん方を相手にイベントを開催できるパワーを持っている。

・地元に根付いた主体的な取り組みは、すごい動員力がある。巻き込み力みたいな感じ。発信からの巻き込みみたいな。

・情報があって、それを送るだけではなく、巻き込んで取組として発展させるような仕組みがそういう団体さんにあれば、更に良い。

・受け手①のところで「地域のメディア」とあるが、確かに自分の地域のことのほうが関心を持つというのは当然だが、NHKさんが全国ニュースの中で地域のことを取り上げて報道しており、そこで取り上げられたことで、その地域の人も当然関心を持つ。また、同じような状況にある、他の地域の人たちも関心を持つということは大いにあり得るので、「地域の」と限定しないほうが良いと思う。また、教育関係者・機関というところは非常に賛同するが、具体的な行動として国土交通省さんと文部科学省さんとの連携関係を通じてとか、教育関係者・教育機関に対して単に情報を発信するということだけだと、その存在を知るだけで終わってしまうということが往々にしてある。また、子供の頃からの防災教育を植え込めるような仕組みづくりというのを考えられるといいと思う。

・今年は関東大震災100年であり、節目の時には社会の関心も高まるので、報道するというのは大きな影響があると思っている。その点を踏まえると、過去の災害を伝承していく、それぞれの地域の取り組みをカレンダー化できないか。日付が持つインパクトというか、何年何月何日にここで水害がありましたといったもので見てもらうと、その地域はもちろん、その地域の方々は割と知っていることでも、社会一般に思い起こしてもらえると思う。このプロジェクトが進行していった時に、カレンダーでここをクリックすると、この水害がありましたという見せる仕組みも考えられる。日付は災害の自分事として分かってもらうには情報の一つだと思う。

・大変重要な点だと思う。水災害は特にそう。地図とカレンダーをプラスすることに賛成である。事例はあるが、その機能がそのままいいかどうかは別として。

・弱者をどう救うかということは、防災のテーマであることは間違いないと思うが、そこに伝わる、どこで伝えるのかという内容が無いと思う。例えば、ヘルパーさんたちの訪問介護等先や高齢者が集まって楽しむ場所にどのように伝えるということも大事と思う。教育は学校でやるが、弱者に伝わる、伝える方法、場所、機会等についても、どこかに加えられたらいいと思う。

・まずは自助が中心ではあるが、共助にもつながる。そういう多様な方たちにどう伝えるかという点も重要。

議事3.プロジェクトの進め方・体制

・認定のインセンティブに「案件紹介」とあるが、むしろ、イベントをプロジェクトまたは協議会のほうで主催していただいて、そこに出ていただくということが一番の大きなインパクトを持っていると思う。情報発信にもつながるが、多数の方々が来る場での紹介は一番効果的だと思うので、「イベントでの登壇」という表現も良いのではないか。
また、プロジェクト名については、自分事化協議会をそのまま名前に出した方がいいと思うので、「災害の自分事化プロジェクト」が良い。認証名については、プロジェクト名が決まったら、何とかプロジェクト認定災害伝承というのがシンプルな考え方ではないか。例えば、「災害の自分事化プロジェクト」というプロジェクト名に決まったのであれば、「災害の自分事化プロジェクト認定災害伝承」というのが多分シンプルな名称。そういう意味では、「認定災害伝承」というのがシンプルな言い方だと思う。

・インセンティブに「活動拠点をテリトリーとする地域メディアによる取材・報道」とあるが、言葉の捉えられ方によっては少しメディアに強制してしまうような印象を受ける。メディアに対して取材あるいは報道を依頼するという意味だと思うが、メディアとすると義務化されるという抵抗感が生じないような表現にして欲しい。私にとって、自分事化という言葉は非常にインパクトがあり、我々の報道目的にも相通じるので、認証の名称には「自分事化」が入るような工夫をしたほうが、インパクトあるイメージとして浮かびやすく、広がりやすいと思う。防災は自分事化だということを、このプロジェクト、この機会を通して広がっていき、新聞記事にもそういう見出しとかが取れるようなことが大事だと自分の反省も含めて思う。

・手を挙げる側とか、あるいは地域の側からすると、重要なのは認証名ではなくてプロジェクトの名前ではないか。「自分事化、手挙げた？」「いや、まだ」のような会話がしっくりきている感じがするので、プロジェクトの名称は「災害の自分事化プロジェクト」が良いと思う。インセンティブの「表彰」については、メディアを活用していただければと思っており、東京での発表もあってしかるべきだと思う。また、それぞれの地域で、例えば県庁、地方整備局で行えば、新聞社の地域版、ローカルニュースなどでも扱っていただけると思うので、広く活用していただければと思う。

・メディアとの連携は、そういう場を活用していただくということ。

・ジオパークの全国大会は東京ではなく、各地域の持ち回りであり、50～60名程度が集まって、研鑽し合うというイメージ。地球惑星科学連合は、毎年、幕張メッセで開催され、2,000から3,000人程度が集まる。

・今年の「ぼうさいこくたい」の入りは、過去最高の15,000人と聞いている。規模感の大きいもので発信をするのも良いが、あまり大き過ぎると、お互いの共有化、密な交流とか切磋琢磨の場が少なくなるかもしれないので、地方でやるほうが効果的かもしれない。

・本日欠席の委員は、プロジェクト名は「災害の自分事化プロジェクト」認証名は「優良防災伝承遺産」を推された。

・まだ少し宿題が残っているが、今後、取りまとめをさせていただき、宜しければ今回が最後なので会長に一任をいただきたいと思う。かなりタイトなスケジュールだと思うが、順調にいけば、まとまったところで公表していただいて、来年度、少し活動が始まればと思う。

・このプロジェクトを通じて、地域での活動が盛り上がっていったり、お互いに切磋多琢磨することで自分の改善につなげてもらったりするステップアップの場になって、その波及効果が地域につながっていくことを期待している。今はそのような仕組みが存在しないので、地域のことは地域全体で見える化して、研鑽を積むとか、4年を経て更に良くなる仕組みとなりよう、ぜひお力添えをいただきたい。

・今は、ばらばらに全国各地域で一生懸命やっていらっしゃる方たちはたくさんいらっしゃるが、ここに行けばいろいろな団体のいろいろな取り組みが見られるというものができるというのは非常に良く、望ましいことと思う。最初は自分事化という言葉に対する違和感があったが、慣れると結構、この言葉はいいのではないか、というふうに思えてきた。多分、皆さんも最初は、災害の自分事化って何？と思われるが、言っていくうちに割と自分事化というふうに短縮されて広まっていくような気がするので、プロジェクト名は「災

害の自分事化プロジェクト」がいいと思う。認証名については、「災害伝承」は必ず入れていただきたいので、災害伝承認定とか、災害伝承優良認定とか。個人的には「日本」を入れたいところだが、そこは皆さんの意見を集約していただければ結構。このプロジェクトはWebを立ち上げられるということなので、こちらでも取り上げさせていただきたい。

・サイトが立ち上がれば、連携し易くなる。それぞれ、目的と立場、視点が違うので。

・水害の伝承というのは、すぐ痕跡がなくなってしまったり、写真がなかったりして非常に難しいと感じてきたところに、このような意欲的なプロジェクトに関われたことをうれしく思う。あちこちで水害が起きている中で、一覧性があり、全体が見えて、それぞれが底上げできるような仕組みに育っていけば、うれしく思う。

・１年ほど前に読売の紙面で磯田道史さんとかと座談会したときに、「災害の自分事化」と大きく書いていただいた。今後のスケジュールは、間に合うのであれば、来年の梅雨時とか、６～７月上旬の意識が高まるところで認定は１回やりたいと思う。取りまとめを年度内ぐらいにして、その辺りで応募要項ができて、並行して流域治水協議会には国交省さんから予告もしていただきつつ選んでいただいければ、理想的。その中で、必要ならば、ロゴマーク、名称は、場合によっては商標も取るのはありかと思う。認証名が最後に残るのかもしれない。それぞれの思いもあるが、認証を受けた方が、「今度、うちのが〇〇に認定された」と言うように、その〇〇というのはいい言葉にしたいと思う。災害、自分事化活動、伝承等を言葉にすると漢字七、八文字位になるが、並行してそのニックネームの設定も想定される。ここが最後の思案どころだと思う。

・これだけのプロジェクトの活動が進むと、期待としては、次世代の若者にもかなり、学習・教育の中だけではなく、活動の場になると思う。ホームページ、多様なＩＴの技術も、彼らがどんどん発展させていただけるのではないかと思う。そのような場、システムをここで提供する事は、将来の防災に対して重要と感じている。

2024
0521